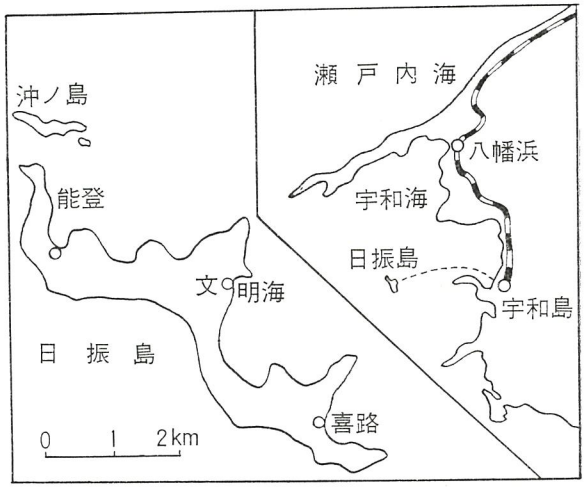
日振島の印象

窪田哲三郎

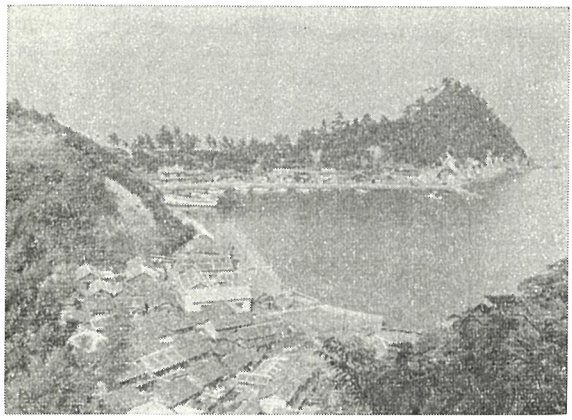
1

日振島。美しい魅惑的な名前をもつこの島は、宇和島市の西方約四〇粁の海上に、細長い姿態を横たえてひっそりと浮かんでいる。面積五・四八平方キロ、人口約一五〇〇人。元来、日振は「火振」であって、神武東征の際、島民が暗夜に火を振って天皇の航海を案内したという伝説がある。また天慶・承平の乱の藤原純友が根拠地とした海賊の島として知られ、戦後はネズミの爆発的発生とその横行が話題を集めた。

昨年の夏、私は同志社女子中高の卒業生六名と共にこの島に渡る機会をもった。彼女たち（高田伸子・同志社大学文学部、堀江祥子・同上、櫨山ユリ・同上、端美和子・同上、中川幸子・早稲田大学教育学部、住井聖子・京都大学薬学部）は現在大学四回生、大学も専攻もさまざまだが、女子中学あるいは高校在学中、地歴クラブのメンバーだったいわば地歴クラブOGである。女子中学、高校生という立場に制約されて在校中残念ながら僻地の地域研究を意図しても不可能であった。それがいま、学生々活最後の夏を懸案の地域研究で飾ろうと熱心な旧部員が集って来た。顧問であった私としても喜ばしい限りであったし、張切らざるをえず、種々検討の結果、対象地域に日振島を選んだのである。その豊かな伝説と歴史の中にエキゾチックな興味を覚えた故でもあるが、それ以上に私たちの知らない離島の人々



の厳しい生活の実態をこの目で確かめたかからである。また関西学院大学の大島襄二先生（同志社大学講師）がかつての女学校時代在職の宜みから同行して下さったのも心強かったし、現地との交渉は宇和島東高の山田先生と宇和島公民館長の八代氏が引受けて下さった。



日振島　明海部落

一週間の僅かな日程であったが中高時代の仲間意識がよみがえり、親切な地元の人々の協力に支えられ、ささやかながら実に楽しく有益な研究旅行を了えることができた。その成果の程は学生諸君の発表にまつことにしてここでは、島の印象を綴りながら島の抱える二、三の問題について考えてみたい。

2

日振島には喜路、明海、能登の三つの部落があるが、能登部落の沖合に沖ノ島と呼ばれる小さな無人島がある。東大旅行研究会「島の旅」にも書かれていたが、海はあくまで青く澄みきって、貝殻の砕けた白い砂が一面まばゆいばかりに敷きつめられた浜辺には、天然記念物の浜木綿が豊かに乱れ咲く――といった景勝地だ。だが中央の小高い丘を登りつめると真新らしい殉難碑が建てられて、デラ台風の悲劇を語っている。

昭和二四年六月二〇日、ラジオは台風の接近を伝え豊後水道を北上する恐れありと警告していた。しかし地元の漁師たちは梅雨どきに襲来した台風は無いと、自らの経験を頼んで無暴にも続々と出漁したのである。真夜中、佐田岬半島塩成沖で操業中の船団は猛烈な台風に襲われて、暗夜の海上は無惨な修羅場と化した。このとき海の藻屑と消えた日振の漁師は一〇六名、一家の主柱と頼む働き手を失って全島は悲歎のどん底にたたき込まれた。デラ後家という悲しい言葉がささやかれたのがこの事件のあとである。流失漁船四七隻。被害総額は一・二億円に達し、戸数僅か四〇〇戸の寒村日振にとって精神的にも経済的にもまさに壊滅的な打撃であった。

この災害の直接の原因は台風情報を無視して出漁した漁師たちの科学的知識の欠除に帰せられよう。だが碑面に刻まれた遭難者の一人一人の名前をたどってゆく中に、このような危険を冒してまで出漁せざるを得なかった貧しい沿岸漁業に生きる男たちの生活条件が胸に迫って、どうしようもない暗然たる思いに駆られたことだった。

3

宇和島藩の藩政時代の昔から日振島は重要な漁場であり、今でも島のほとんどの家は漁業に関係している。一本釣や磯建網の小漁業もかなり活発だが、何といっても日振島漁業

の中心は往年のイワシ船曳網から転換した中型イワシ旋網漁業だ。これは網船を中心に灯船、運搬船など計六～七隻が船団を組み、約四〇人の網子によって操業するかなり規模の大きい漁法だが、漁場は狭い宇和海内に限られている。

地元の漁業研究家横浜雄幸氏は旋網一統の年間総漁獲高を平均一八〇〇万円とみて、網子一人当りの年間収入を一八～二五万円（役によって差がある）と推定し、その低収入の実態を明らかにしているが、この場合漁獲高の分配法により問題があるようだ。つまり固定給の保証が全く無く、総水揚高から雑費を差引き、残額を網元と網子で折半するという前近代的な完全歩合制が漁民の収入を著しく不安定にしていることである。だがこの点を改革しようとしても、宇和海のイワシ資源が昭和三〇年頃を境に激減し、大海区制によって他に漁場を求めない限り、漁獲絶対量の増大が期待されない現状では、漁民の生活を保証するに足る実質的な固定給制度の採用は困難であり、下手をすれば網経営そのものを破綻に導く恐れがある。結局生産性の低い旋網漁業は魅力的な職場となりえず、漁獲高減少と労働力の不足から次第に整理され、昭和二四年頃、喜路四、明海二、能登三の計九統が今では喜路二、能登二、計四統に減少している。こうしてかつて盛漁をうたわれた日振島のイワシ漁業もさびれる一方である。

4

多くの漁家は零細ながら二～三反程度の耕地を所有し、漁業の片手間に農業を営んでいる。だが平野といってほとんどない島のことだから、南予地方一般の例にもれず、海岸から山頂まで急斜面の山肌をぎっしり刻んで段々畑が開かれている。農業は主として婦女子の仕事だが、とにかくたいへんな労働である。畑にはさつまいもと麦が植えられて来た。水田は全くみられない。

ところで段畑耕作の重労働に耐えて、いもと麦を作り続けて来たのは、自給食糧の確保として大きな意味があった。しかし配給制度の実施と戦後の食生活の向上によっていも、麦を常食とする世帯がほとんど消失した現在替って商品作物として、積極的に栽培するには労が大きい割合にあまりに収益が低いといわねばならない。そこで南予の他地方で成功しているもっと成長性の高い柑橘やフルーツパッションの導入が真剣に企図されるのであるが、防風林の育成すら困難であるという厳しい自然条件―夏の台風、冬の季節風が激しく吹きすさぶ―に制約されて成功の見込みが薄い。

こうして島では農業は次第に見捨てられる運命にあり、労働力の流出が著しい結果、廃棄耕地は増加する一方だ。全耕地の五割、明海部落のごときは実に七割までが、夏草の茂るままに放置されている。藩政時代から営々として築き上げられて来た先祖伝来のいわば島民の汗と涙の結晶である段々畑が、雑草の下に埋まり荒廃してゆく状態をみると、時代の波の激しさを改めて認識させられる。

5

漁業は不振、農業も見込み薄となれば、あとはお定まりの出稼ぎに頼らざるをえない。この島では二、三男ばかりでなく一家の主人までが阪神その他へ長期出稼ぎにゆくことが普通の状態になっている。とくに頼るべき旋網の最後の一統が昭和三七年に倒れた明海部落では全戸出稼ぎの村といってよいほど盛ん

であり、かれらの仕送りによって残された家族の生活が成立っている。中学卒業生もこのような現状から島に残るものは一～二％程度ほとんど全部が阪神その他へ就職してゆく、したがって島の人口は減る一方で、昭和二五年の二、二〇一人が三八年には一四六八人に減少した。挙家離村が目立ち始めた現在、この傾向は今後ますます激化する一方だろう。

6

考えてみればこのような状態は日振島に限ったことではなく、全国の他の離島の多くに共通することである。高度成長政策の地域的な歪みは発展する都市域と停滞する僻地との地域較差を容赦なく拡大する一方である。離島産業の振興はもちろん積極的に考えられなければならないし、日振島でも真珠養殖の試みが進められているが、一次産業以外に頼るべき可能性のない現状では自ら限界がある。昔から高い人口圧に悩み続けて来た島に、現在地すべり的な人口流出が起っているのもやむをえない結果といえよう。島の親たちも子供に漁業や農業を継がせて島に残ることをもはや期待していない。淋しいことには違いないがそこは明るく割切っていた。

だが出てゆく者はとにかく島に残る人たちの生活は果して守られようとしているだろうか。島に終日電気が灯るようになったのは私たちが島に着いたちょうどその頃だった。それまでは自家発電による朝晩限られた短い時間の送電で、テレビを楽しむことも冷蔵庫の利用も思うに任せなかったのである。離島振興法の乏しい資金によって車の通る道路がいまやっと着工中である。今でも島には一台の自動車もないのである。そして何よりも悲しいことはここもまた医者の無い村だった。繁栄の陰に忘れられ、取残された島―やはり地方政治の貧困と、政治における愛情の欠除の問題を考えざるをえなかった。島外に去ってゆく若者たちにももっと良い条件の就職はできないだろうか。御多分に洩れず集団就職者の中には転々と職業を換え、都会の誘惑の渦中に転落してゆく者が多いのである。積極的な就職先の開拓、これが島に課された最大の使命であろう。

だが島の人たちの表情は実は非常に明るかったのである。私たちの都会的なひ弱な感傷や抽象的な地域開発論などけし飛んでしまうほど明るい健康的な楽天性がそこにはあった。戸別調査に廻った女子学生諸君が、女性の激しい労働に驚いたりしながら、一番感銘を受けたのもまさにその点であった。そして何よりも嬉しかったのは島の人たちの素朴な親切だった。とくに一人の病人が出たとき、自室を提供してまで暖かく介抱して下さった診療所（医者はいない）の年老いた看護婦さんの親切を忘れることができない。その他実に多くの方々から親切な御世話にあずかった。いちいちの名前を上げることは差控えさせて頂くが心から御礼を申し上げたい。物質的に恵まれぬ遠い遥かな島で人の心の温かさを知ったこと、これが今度の旅行の最大の収獲だったかもしれない。

最後に同志社人として感激したのはここにも古い同志社の先輩が活躍され、後輩の私たちを暖かく歓迎して下さったことがある。日振中学校の池部先生、喜路の古谷氏にはとくにお世話になった。「地の塩」として政治に教職に地味な活動を続けられる両氏の御健闘を心から祈りたい。

（女子中高教諭・社会）

平民主義に生きた人々

新島先生生誕記念講演要旨

「新島先生生誕記念講演会」は新島先生の生誕122周年にあたる、さる4月13日毎日新聞京都支局ホールで開かれた。憲法・政治学研究会の主催によるもので講師に山室民子・田畑忍・住谷悦治の三氏を迎えて行われたが、学生・市民ら約300名の熱心な聴衆がつめかけた。以下はその講演の要旨である。

山室軍平と廃娼運動

山室民子

日本の法律は、明治五年以来、人身売買を禁じているのに、娼妓は前借金という名の身代金で、貸座敷業者という名の奴隷売買人の手に売られ、売春を強制された。廃業して更生したくても、楼主と三業組合長との同意捺印が無くては警察で受け付けない。自分らの利益に反することに捺印する楼主や三業組合長のあろうはずがなく、そのため娼妓は泣き寝入りに商売を継続するか、さもなければ不義理の借金に首が回らなくなった男でも見出し、心中の名の下に一緒に自殺するよりほかに道が無かった。救世軍は娼妓が金銭貸借の関係にかかわらず、いつでも売春を廃止すべきことを主張して起った。

まず機関紙「ときのこえ」を特集して世論を喚起し、娼妓に廃業を勧告すると同時に、他方では救護を求める婦人たちのため婦人救済所（後に婦人ホームと改称）を開設した。明治三十三年八月のことである。救世軍人はその「ときのこえ」を持って遊廓に行き配布した。矢吹大尉が引率して吉原に行った一隊は暴徒に襲われて負傷し、警察隊の出動で騒ぎが鎮まった。それから間もなく、山室軍平が書記長官デュースと洲崎に一娼妓を救済に行き、再び暴力団の大襲撃に会った。新聞は筆を揃えてこれらの事件を報道したが、中でも毎日新聞は島田三郎、木下尚江らが、論説に雑報と廃娼問題を取り上げ、救世軍のため義捐金まで募集した。その中に娼妓の遊廓から逃亡してくる者、書面をもって救済を依頼してくる者らが日々増加した。当局もこの事態を放置することができず、同年十月、内務省はそれまで各府県でまちまちに行なわれていた取締を改め、新しく全国共通の娼妓取締

規則を発布し、娼妓は自由の意志により廃業し得べきこと、これを妨害する者はそれぞれ厳重に処分せられるべきこと等を規定した。救世軍のこの問題に対する主張が認められたのであった。

それからしばらくの間は全国を通じて娼妓の自由廃業が流行した。その結果、明治三十二年、全国に計五万二千二百七十四人いた娼妓が、運動の起った三十三年を中にして、翌三十四年には計四万百九十五人となり、一万二千余人の減少を見た。東京だけでも三十二年には六千八百七十一人いた娼妓が、三十四年には五千百五十八人となり、約二割五分の減少を見た。世間では「巷説救世軍」という講談や救世軍廓之今様」という演劇が行なわれ、「東雲のストライキ」という流行歌が歌われて、廃娼の思想が一般に流布した。

山室軍平

しかし、公娼制度の根城は堅く、その全廃は容易ではなかった。山室軍平は、廓清会、基督教婦人矯風会等の同志らとも協力してこの問題のため闘い続けた。その間、年々、幾百という婦人たちが泥水稼業から足を洗った。遅延していたが、戦後、占領下でようやく公娼制度に終止符がうたれた。公娼という目前の目的は一応果した訳だが、廃娼は公娼のみならず、私娼と彼らに関連あるすべての罪悪の絶滅を意味しており、運動はまだ続けられねばならない。

わが国のプロテスタントの大多数の先達が士族出身であるのに対し山室軍平（一八七二～一九四〇年）は平民の出である。同志社で新島先生始め多くの師友の感化や奨励を受け、のち救世軍に投じ、同軍における伝道・奉仕の一端として、廃娼運動を行なったのである。

（元救世軍総務部長）

安部磯雄と山川均の平和思想

田畑忍

一

安部磯雄先生（一八六五年―一九四九年）は、新島先生の教を直接に受けてその理想に生きた大先輩である。明治十八年に同志社を卒業して同志社で教鞭をとり、次いで岡山教会の牧師となり、のち米国に留学した。米国留学中にベラミーの空想的社会主義の著書『ルッキング バックワード』を読んで感動し、帰国後早稲田の教授（明治三十二年）となり、かたわらユニテリアン協会（のちに社会主義協会）をつくって講演と文筆による啓蒙活動を行なった。また明治三十四年に堺・木下・幸徳らの諸氏とともに社会民主党をつくったが即日解散となり、三十九年には日本

安部磯雄

社会党の組織に参画した。しかし四十三年の幸徳事件以後は政治的活動を離れるほかはなく、禁酒廃娼等の廓清運動と学生野球の育成につとめた。のち、いわゆる大正デモクラシーの波に乗じて政治活動を再開する機会を得た。すなわち大正十三年より昭和十五年にいたるまで、常に無産政党運動の一方の旗頭として活躍したが、戦前戦後社会大衆党の反動化した暗黒時代には、また隠遁の生活に甘んじ戦後のデモクラシー開花に当って遂に再び起ち得ずして逝去した。

安部先生の平和思想の特色は、無抵抗無軍備の中立非戦主義にある。それは、スイスの永世中立をモデルとするもので、すでにその社会民主党の綱領中に非軍備政策をかかげ、当面の方策としては徹底的な軍備縮小を説いていた。「平和が人道であるならば、平和を世界に宣言して、それがために一国が亡びても善いではないか」と主張するほどであった。そうした主張に、「キリストは平和の化身であり四福音書に溢るるものは平和思想である」とする信念と、社会主義の実現なくして平和の実現は不可能である、という確信の筋金がとおっていることは明らかだ。この平和思想が、キリスト教主義と社会主義に立脚するものであることは、まことに明らかである。彼のそのような不断の努力は、新島先生から、「安部さん！　よくやってくれましたね。」といって褒めていただきたいためで、何の野心もないと言っていた。彼のクラスメートの村井知至・岸本能武太も彼とともに社会運動を行なった先輩である。

本年の二月四日はちょうど安部先生の生誕百年に相当する。

二

山川均（一八八〇年―一九五八年）先生が同志社で学んだのは、明治二十八年から三十年にかけてであるから、明治二十三年に逝去された新島先生を知っていない事は当然だ。しかしその頃の同志社には新島先生のイメージが残っており、先生は新島門下で平和主義に徹した柏木義円や浮田和民の教を受け、キリスト教的人道主義に影響され、また徳富蘇峯と民友社出版の諸著書によって啓蒙され教育された。したがって、文部省の命令で教育勅語を教えるようになった新学制と森田久万人の勅語教育に反撥して、あっさり途中退学をして東京に赴いた。この放浪中に、東京政治学校の講演に列し、また内村鑑三の影響を受けて、そのキリスト教思想を尖鋭化した。のみならず、同志社時代に読んでいた民友社版の『現代の社会主義』（カーペンター）などで、すでに漠然とした社会主義思想を持つようになっていた。しかし本格的なその勉強は、明治三十三年に筆禍不敬事件で牢獄に投ぜられた三年半の間に、アダム・スミス、リカード、マーシャルらの経済学書から始めて、マルクスの『資本論』を読破することによってなされた。のち四十一年にも数回入獄（合せて二年数ヵ月）、更に昭和十六年に入獄（七年半）したので、その獄中生活は通計十三年弱に及んでおり、生涯の六分の一を獄中ですごしたわけである。その猛勉強をした牢獄

は、彼にとってはまさに「大学」であったと言えよう。

その著述生活は右の期間を除いて、明治四十年に始り昭和三十三年に及んでいる。著書だけでも戦前に六十冊弱、戦後に二十冊弱を数える。その間無産政党運動と労働組合運動に終始し、社会党から人民戦線運動に移行し、戦後は社会党を支持し、また批判した。その平和論と平和運動は特に戦後になって展開された。もちろん最初から平和主義者であった彼の戦争批判と人民戦線的平和の主張は、昭和十四・五・六年に行なわれているが、そのために投ぜられた牢獄から解放された昭和二十年には早速、戦争責任者を追及している。更に安部磯雄・内村鑑三らの力説した平和主義が、幣原喜重郎を媒介として結実した日本国憲法の制定にさいして、憲法支持の態度を明らかにし、平和革命論者になった。そして昭和二十六年の安保条約以降は、特に平和憲法の擁護・非武装永世中立の必要を強調するようになった。その往年の人民戦線主義の主張が、戦後の反動期に平和憲法擁護を中心とした大同団結必要論の形をとるにいたったのである。このような主張の大小の論文を彼はその晩年に書きつづけたのである。

その中軸となっているのが、すなわち昭和二十七年に出版された『日本の再軍備』一巻である。

三

これを要するに安部磯雄の平和思想は、日本国憲法第九条をつくる一つの基盤となったものであり、山川均の平和思想はこの第九条の永久平和主義を擁護する意味と役割をもって主張されたのである。安部・山川両先生のこのような平和思想を、そのニュアンスの相異にもかかわらず、同志社のキリスト教と新島精神から学んだ徹底したヒューマニズムによるものである、とすることは自然と言えよう。

（法学部教授・憲法）

吉野作造の民本主義と同志社

住谷悦治

わが国のデモクラシー思想の系譜として高く評価さるべき文献は三つあります。その第一は、明治二十五年の酒井雄三郎の『排曲学論』という卓見で、これは都筑馨六博士の『民政論』を駁撃したもので、相手の理論を駁撃しつつ、自らの理論を展開したものとして学問論争の一つの傑作であります（あたかもエンゲルスの『反デューリング論』のごとし）。第二はわが国の政治学の確立者の一人、小野塚喜平次博士の明治三十一年『政治学大綱』（上・下）で、明治三十四年より東京大学でデモクラシーを衆民主義と呼びその政治理論的根拠を明らかにしています。酒井雄三郎はデモクラシーを平民主義と呼んで徳富蘇峯の造語を踏襲しています。第三は大正五年一月、吉野作造博士が「中央公論」に発表した『憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途（道にあらず）を論ず』で博士は、デモクラシーを民本主義と呼んでいます。当時の社会的事情は、先生の「民本主義鼓吹時代の回顧」と

吉野作造

いう一文に詳細に書かれてあります。これら三論文は現代になおこの系譜がつらなって生きていると信じます。

吉野博士は当時「民衆は指導者に依て教育され、指導者は民衆に依て鍛練される」ことを説き「多数の支持協賛に依て生まれる輿論に道徳的価値が認められる」としてデモクラシーの本義を鼓吹し、その主張を六ヵ条挙げています（「回顧」参照）。先生のこの思想と活動の意図は、先生によると、すでに一九〇四年（明治三十七年、先生二十七歳の時）ヨーロッパ留学中ヨーロッパの近代思想を達観し、牧野英一、佐々木惣一の三名と、帰国後、デモクラシー思想を日本に植えつけることを誓ったことにはじまるのでありますが、先生の特質は、キリスト教主義をもって貫かれていることで、その点は同志社出身の安部磯雄先生の社会主義思想と同様であります。

新島先生の遺言の中には、吉野先生の民本主義に相通ずる思想、ことに、平等に人間尊重、機械官僚主義への反対、一方的教育でなく、その本性にしたがって順導する等々同志社教育の精神と相通ずるものがあります。

先生は海老名弾正先生の本郷教会の教会員であり、先生が大正九年に同志社総長として赴任されたとき、よき教授を送るから、とて先生を力づけたといわれます。中島重、今中次麿、石田秀一郎、波多野鼎、林要、河野密氏らは吉野先生の推挽であったときいています。かくて先生は同志社アカデミズムの形成への陰の力であったと思われますし、私への手紙――それはこの会場に展覧してあり、田中惣五郎著「吉野作造」の口絵写真にも出ておりますが、大工原銀太郎総長が九大総長から同志社総長に移るさいは、吉野先生が、大工原氏の顧問格として、いろいろ相談に与っていると書いてあり、大工原総長が交代に際して、進歩的教授マルクス主義教授を馘首するの暴挙なきよう警告を与えているのであります。

吉野先生は、その人生的態度として、聖書にいうところの「右の手に為した善きことを左の手に知らせるな」ということを実際に行った人で、いまも秘話としてある一つをここで明らかにします。それは大正八年の「足尾銅山抗夫のストライキ」のさい、愛弟子の大日本総同盟の抗夫組合長麻生久が、そのストライキ指導に当って労資膏着状態に陥ったさい、ひそかに栃木県警察部長をしていたやはり愛弟子萱場軍蔵（後に警視総監になった）をして、労資仲裁に活動せしめて、さしもの大争議の解決に導いたのですが、そのことを麻生久は死に至るまで知らず、自分の功績のごとく考えていたのでありますし、先生も死に至るまで口をつぐんでいました。そうした善きことを、わたしらの知らないいくたびか果して、ついに他言しなかったのでありますす。わたくしも友人・先輩についてこのほかなお二、三知っております。同志社教育についても、海老名・大工原両総長への助言や、愛弟子の教授たちにも忠言したことであろうし、同志社のある騒動のときも先生は大変心を労して何か善きことをなさったらしいのでありました。

（同志社総長）